

Title	発話文の前提の推定に関する研究
Author(s)	富永, 善視
Citation	
Issue Date	2012-09
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/10751
Rights	
Description	Supervisor: 島津 明, 情報科学研究科, 修士

発話文の前提の推定に関する研究

富永 善視 (1010044)

北陸先端科学技術大学院大学 情報科学研究科

2012 年 8 月 9 日

キーワード: 前提推定, 前提トリガー, 文法的前提.

対話は、複数の主体が共同でなす活動であるといえる。複数の主体が共同するためには、さまざまな知識や信念を共有しなければならない。共有される知識や信念は、相互信念 (mutual belief) あるいは共通基盤 (common ground) と呼ばれており、発話の提示とそれを理解したという証拠のやりとりによって基盤化される。しかし、発話は基盤化される情報をすべて表しているとは限らない。対話参加者は、発話で明示的に主張されていること以外の情報についても、お互いに推測しあうことでやりとりしている。

近年、質問応答システムや音声対話システムが一般に広く利用されるようになった。しかし、これらのシステムは、一問一答であったり決められた形式でしか対話できなかったりすることが多い。より高度な対話を実現するためには円滑な相互信念の基盤化が不可欠であり、発話で主張されていること以外の情報についても読み取ることが重要となる。

発話から推定できる情報として、前提 (presupposition) がある。前提は、前提トリガー (presupposition-trigger) と呼ばれる特定の単語や構文構造によって引き起こされることが知られている。しかし、前提に関する研究は、ほとんどが英語についてのものであり、日本語についてのものはあまり多くないように思える。そこで、日本語の形態に合わせた前提トリガーを示す必要がある。

本研究では、Levinson が示した前提トリガーのうち文法的前提を引き起こすものについて分析し、益岡・田窪が示した日本語の形態に基づいて分類を行った。分析した前提トリガーは、単語型トリガーと構文型トリガーに分けられる。特に単語型トリガーについて、トリガーである単語の形態の違いによって細かく分類を行った。

文法的前提においては、前提トリガーとなる単語の補足語や補足節、構文構造の特定の部分に関わることが前提となる。本研究では、このような前提に関わる部分を前提部と呼び、前提トリガーと前提部との統語的な関係性を明らかにした。トリガーによっては、前提部の違いにより異なる前提を引き起こすものがあるため、前提部の条件についても明らかにした。

明らかにした前提トリガーを辞書データとして用いて、発話文の前提を推定する実験を行った。辞書データには、131 単語の単語型トリガーと、17 パターンの構文型トリガーを

登録した．小説の会話文 600 文を対象に実験を行った結果，90 の前提が推定され，正解数が 57 で，精度は 63%であった．単語型トリガーによって推定された前提は 63 あり，正解数が 41 で，精度は 65%であった．構文型トリガーによって推定された前提は 27 あり，正解数が 16 で，精度は 59%であった．